

極小なもの、大人しいものと、人知れず暮らすハチの仲間が無数にいる中、スズメバチはやはり気になる存在です。本州以南に生息する大型スズメバチの種類数の多さは世界的にみても例がないとされる（松浦誠『スズメバチはなぜ刺すか』）上、キイロスズメバチやコガタスズメバチは都市環境に適応し、オオスズメバチは登山道脇や河川敷の地中にも巣をつくり、多くが人間の活動域と重なっています。

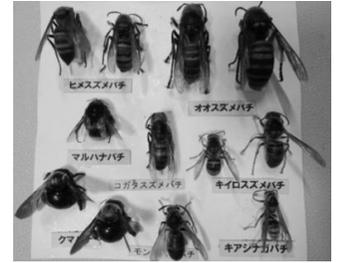
スズメバチたちが刺すのは巣の防御のためとされます。けれども、そもそもスズメバチやアシナガバチは、寄生バチ（日本だけでも何千種、昆虫やその幼虫、クモなどに産卵して寄生する）の産卵管を針に変化させた狩りバチの仲間です。『ファーブル昆虫記』に詳しいツチバチやジガバチなどと同様、それぞれの獲物群を狩りながら子育てをしています。「ミツバチの天敵・オオスズメバチ」はよく知られるところです。強暴なオオスズメバチはキイロスズメバチなどの巣も襲い、一度攻撃を受けたキイロスズメバチは興奮して、何匹もの見張り番が巣の外側にとまっていることもあります。

針を巣の防御にも使うようになったのは、社会性を持った過程にあるのでしょうか、小集団のアシナガバチに比べて、スズメバチには千匹を超えるようになる種類もいて、巣の規模が大きいほど攻撃性も高いとされます。毒液の成分は、幼虫を狙って巣を収奪にくる哺乳動物を標的に進化してきたとも考えられるらしく、無防備なヒトにとってじつに恐ろしい存在です。

それにしても、ミツバチに負けず劣らず高度な社会性を持つスズメバチたちの暮らしぶりには、驚かされることばかりです。

精子を体に蓄えたまま冬越しをしていた女王バチは、春、たった一匹で巣をつくり始めます。小さな巣に受精した卵を産むとメスの働きバチが誕生し、女王バチは最初は狩りもして幼虫を育てます。しかし、暫くして働きバチが数匹になると、産卵に専念、ひたすら働きバチの数を増やすのです。働きバチはメスでありながら女王が分泌する抑制物質によって産卵はせずに、狩りをしては幼虫に肉を与え、朽木を齧ってきては外壁を塗り足し、巣内に留まり壁を内側から齧っては巣盤を増やし、育児と巣造りを分担します。獲物は食べず、樹液や花蜜や甘露、そして幼虫が肉のお礼のように出すアミノ酸豊富な唾液（飲料「バーム」開発の素）を舐めて、励み続けます。巣が拡張してくる夏頃、女王バチが受精せずに卵を産むと、今度はオスバチが誕生してきます。オスたちは居候のようにブラブラと青年期までを過ごしますが、それをしり目にメスたちの営巣はいよいよクライマックス。日長時間が短くなる頃、女王バチは大きい育房に再び受精した卵を産み、新女王の誕生のときを迎えるのです。働きバチの姉たちは巣を屹度守り、どんどん狩りもして、体格の良い妹を何匹も育て上げます。秋が深まる頃、新女王たちは、別の巣を出た後に成熟し結婚飛行を始めたオスバチたちに遭遇すべく、次々と巣を離れ、交尾後、力尽きるオスバチをよそに冬越しの準備に入ります。朝夕の冷え込みと共に、母の女王バチや働きバチも命を終え、どれほど賑やかだった巣も空になって再び使われることはありません。

生態系の一員であるスズメバチ、巣に近づかず、気をつけて秋を過ごしましょう（近年、分布を広げている攻撃性の高いツマアカスズメバチの営巣も、9月に北九州市で確認されました）。



森のセンターのハチ標本
5種類のスズメバチも
オオ・キイロ・モン・コガタ・ヒメ
(落ちていた個体による)



寄生バチ・
アケビコノハヒメコバチの卵
のついたアケビコノハの幼虫
夏合宿で観察 2015. 8. 9



チャイロスズメバチ
他の巣をのつとる社会寄生性
を持ち攻撃的
根元の隙間のモンズズメバチの
巣をのつとったものか
大文字山にて 2015. 7. 25